

〔四月〕二十六日。早朝。雲霧かすかに霽れぬ。乳山を望見するに近く西方にあり。風は東北より起りたれば、帆を懸けて南行す。巳の時、乳山西浦に到り、船をとどめて停住せり。山嶋あいまもりて垣めぐりかこむがごとし。その乳山の体は峻峯、高穎にして頂上は鋒のごとし。山根は嶺より下りて六方を指す。澳の西辺においてまた石山あり、巖峯は嶺をならべ高秀にして天に半ばならんとす。東と北とも山ありて連らなると雖も、しかもなお斜めなるがごときのみ。未の時、新羅人三十余、馬にのり、驢にのり、来りていうに「押衙が潮の落ちなば来りて相見えんとす。されば先に来りてまちてむかうるなり」と。中について一百姓ありていうに「昨日、廬山より来る。本国の朝貢船九隻がともに廬山に到れるを見たり、人物は損することなし。その官人らはすべて陸地にのぼり、幕屋を作りており、従容として風をばまつ云々」と。久しからざるの間に、押衙は新羅船に駕りて来りぬ。船を下りて岸に登れば多く娘子あり。朝貢使の判官は新羅訳語の道玄をつかわして事の由を通ぜしむ。その後、粟(田)録事も船を下り、押衙のところに到りて相見え、兼ねて牒を作りて食糧を請うらく「先に東海界に在りて、ただ過海の糧(を備うる)のみ。この船は海を過ぎ」

104〔四月〕廿六日。早朝。雲霧微霽。望見乳山、近在西方。風起東北。懸帆而行。巳時。到乳山西浦。泊船停住。山嶋相衛、如垣周圍。其乳山之躰、峻峰高穎、頂上如鋒。山根自嶺下、而指六方。於澳西邊、亦有石山。巖峯竝嶺、高秀半天。東之与北、雖有山連。而猶斜耳。未時。新羅人卅餘、騎馬乘驢來云、押衙、潮落、擬來相看。所以先來候迎。就中有一百姓云、昨日從廬山來。見本國朝貢船九隻、俱到廬山。人物無損。其官人等惣上陸地、作幕屋在、從容候風云云。不久之間、押衙駕新羅船來。下船登岸。多有娘子。朝貢使判官、差新羅譯語道玄遣、令通事由。已後。粟録事下船、到押衙處相看。兼作帖、請食糧、先在東海縣、但過海之糧。此船過海、逆風却歸、流着此間。事須不可在此、喫過海糧。仍請生料云々。押衙取狀云、更報州家、取處分。晚頭。帰宅。終日、東北風吹。

円仁行記の開成四 839 年四月二十六日 (山東省乳山港へ)

解説(中国語)：

幢，原是中国古代仪仗中的旌幡，是在竿上加丝织物做成，又称幢幡。由于印度佛的传入，特别是唐代中期佛教密宗的传入，将佛经或佛像起先书写在丝织的幢幡上，为保持经久不毁，后来改书写为石刻在石柱上，因刻的主要是《陀罗尼经》，因此称为经幢，是源于古代的旌幡。经幢一般由幢顶、幢身和基座三部分组成，主体是幢身，刻有佛教密宗的咒文或经文、佛像等，多呈六角或八角形。在我国五代二宋时最多，一般安置在通衢大道、寺院等地，也有安放在墓道、墓中、墓旁的。